.構造改革特別区域計画

1　構造改革特別区域計画の作成主体の名称

石川県鶴来町

2　構造改革特別区域の名称

白山・鶴来ツーリズム創造特区

3　構造改革特別区域の範囲

鶴来町全域

4　構造改革特別区域の特性

（１）地勢及び気候

鶴来町は、石川県の南部・加賀地方に位置する。北側は県都・金沢市に隣接する一方、北東部から南部にかけて日本三名山の一つ白山（2,702m）に連なる急峻な低位山地と丘陵地が続き、北部から北西部には、金沢平野の一部をなす手取川扇状地が広がる。白山に源をもち、町の西部を流れる一級河川・手取川は、源流部と日本海の河口部までの間が全国屈指の標高差があることから、梅雨時などは幾度となく氾濫を繰り返してきたが、治水事業のかいあって、今日では洪水はほとんど見られなくなった。

気候は白山山系に連なることもあり、石川県内でも寒冷地に属し、冬季の積雪は平野部でも 50㎝ 前後になり多い。

（２）沿革

鶴来は、古くは崇神天皇の代に、加賀一ノ宮である白山比咩神社と金劔宮が創始され、加賀地方の中心として栄えた。奈良時代の初期、白山が開山されて以来、数多くの寺社の門前町として、鎌倉、南北朝時代に至るまで盛況を保った。

しかし 16 世紀、前田利家が金沢に入城するとともに状況が変わり、鶴来は金沢平野と白山麓の村々とをつなぐ宿場町としての性格を強くしていった。昭和 29 年、旧鶴来町、一ノ宮村、蔵山村、林村、舘畑村が合併して現在の鶴来町になった。

人口は合併時の 29 年当時は約 12,400 人だったが、金沢市などのベッドタウン化が進み次第に増え、近年は約 22,000 人を数えるに至った。

（３）地域づくり

鶴来町は、霊峰白山と手取川という豊かな自然風土を背景に、第４次鶴来町長期計画の基本理念である「伝統と創造が調和した心豊かなまちづくり」の下、着実な進展を見せている。産業面では、農業が水稲を中心に、丸芋、ブロッコリー、レタス、ナスなども栽培し、金沢の近郊として商品作物への取り組みも進められている。その中

で、酒米生産が盛んで、平成 15 年には 617.5 ㌧を出荷し、石川県内のシェアのトップとなる 40.9%を占めている。生産者は、地元酒造メーカーとの間で研究会をつくり、酒米の品質向上に力を注いでいる。

製造業の分野では独自の展開をみせている。鶴来の地は、豊かで良質な手取川伏流水に恵まれていることから、古来から「加賀菊酒の里」として酒造りが活発に行なわれ、現在は全国ブランドの二大酒造メーカーが、業界のリーダー的立場にある。同じ醸造分野では、醤油、味噌、麹、酢製造も地場産業として、地域に根を下ろしている。伝統工芸の分野では、獅子頭や刃物、牛首紬、檜細工などが生産を続けている。こうした昔ながらの産業集積が近年では、「醸造のまち」「ものづくりのまち」として注目されるようになり、金沢などから観光に訪れる人が増えてきた。

また、市街地では、まちなみ景観推進事業が進められている。中心部には、由緒ある白山比咩神社に代表される神社や寺院が数多く残り、こうした歴史的建造物と町家などの伝統的な家並みとの調和を図るなかで、まちなみの景観を向上させようという取り組みである。このような景観整備が鶴来町独特のものづくりの生業を引き立てる形となり、街の魅力を高めることになっている。

このような取り組みが功を奏して、鶴来町ではグリーン・ツーリズム（自然）と「ものづくり」（もの）、「まちづくり」（まち）を融合、一体化させた鶴来町ならではのツーリズム（観光、体験、交流、宿泊、飲食、ショッピング等）が育ちつつある。その一つが、広域観光推進団体「白山連峰合衆国」が主催する「ちいさな旅」である。これは、ミニローカル鉄道である北陸鉄道石川線の電車（２両編成）を活用して金沢市内から日帰りツアー客を招くもので、客は鶴来駅下車後、町内の名所・旧跡を探訪しながら、老舗での買い物や飲食店での食事を楽しむ。金沢などから参加した客は近郊にありながら意外と知らなかった鶴来町の魅力を手軽に堪能することができ、評判がすこぶる良い。

また、「ちいさな旅」とよく似た別の鶴来町への日帰りツアーがある。石川県が平成 15 年から開催している「加賀百万石ウオーク」の鶴来コースである。参加者は街中をめぐり、鶴来伝統のものづくりにふれるなどの内容である。これは、「ちいさな旅」に優るとも劣らない人気を集めた。

このように、鶴来町は様々な地域資源に恵まれてはいるものの、地域間競争が激しさを増し少子高齢化が進む今日においては、将来にわたっても活力を維持していけるかどうか楽観を許されないのが現状である。農業においても従事者の高齢化や担い手不足が進み、遊休農地が増加しつつあることから、良好な農村・自然景観が維持できるかどうか不安が募っているのが実状である。

5　構造改革特別区域の意義

本構造改革特区の認定により、自然の保全、産業の振興、地域コミュニティーの醸成と多方面にわたる地域づくりを促進し、鶴来町に新たなスタイルのツーリズムを確立させる契機になり得ると考える。すなわち、濁酒は、地域の豊かな自然や農の営み

から生まれたという第一義的な位置付けもさることながら、鶴来町の場合は、酒づくりを筆頭とした固有の醸造産業や、ものづくりの土壌があり、濁酒はこのような「手仕事産業」が母体となり、新たな創造の花を咲かせたととらえることができるからである。この伝統的なものづくりに、古いまちなみの風情が加わり、鶴来町は独特の存在感を増していくことになるのである。

このような地域のグランドデザインの下、濁酒を軸にして、多彩な地域づくりの展開が可能になる。

第一に挙げられるのは、「自然」「もの」「まち」を融合させたツーリズムの推進である。これは、鶴来町域のエリアにおいて、白山山系に連なる獅子吼高原や手取川などの自然に親しみながら、酒づくりや伝統工芸などのものづくりの現場を訪ねたり、古い歴史的町並みを散策したりするツアーで、わずか１日の間でもそれぞれのエッセンスを味わうことができるのである。こうして開発された旅の来訪者は石川県内のみならず、北陸三県など県外も見込まれる。この種の旅は、地域の小中学生らの総合学習や遠足の場にもなり得る。また、どぶろく祭りなどのイベントの開催により、地域滞在に新たな魅力が加わる。

また、地域の自然資源の保全や産業の振興にも寄与する。コメを見直し、尊重する雰囲気を生み、ひいては農地や森林資源の保全活動が促進される。濁酒を振る舞う農家民宿や農園レストランの拡大の呼び水になろうし、濁酒にちなんだ加工食品や土産物の研究開発も促進される。

そして、もう一つ別の観点から指摘できるのは、地域の子どもたちや住民への教育的効果である。濁酒をめぐる地域風土や地域産業は、小中学生や住民らの学習の題材になり得るとともに、濁酒を秋祭りなどの行事に活用することにより、地域コミュニティーの醸成にも役立つ。

６　構造改革特別区域の目標

（１）自然と産業・文化にふれる白山・鶴来ツーリズムの確立

近年の余暇時間の増大や価値観・ライフスタイルの多様化などから、観光に対してより良質できめ細かな内容を求めるニーズが強まっている。鶴来町ではこうした傾向を受けて、豊かな自然と伝統産業、歴史的なまちなみと連携したツーリズム（体験型観光）の確立を目指す。広域観光推進団体「白山連峰合衆国」が鶴来町内を舞台に実施して好評な「ちいさな旅」（４　構造改革特別区域の特性（３）地域づくりの項で詳述）をさらに発展、拡充する形で、旅の切り口を自然探訪や工房見学、祭り体験、酒米づくり体験等にまで広げて、参加者の創造性と好奇心を刺激するツーリズムを展開する。

（２）自然資源の保全とふるさと産業の振興と創出

地域に広がる豊かな自然は、農林業という第一次産業だけに恩恵をもたらすものではなく、製造業や観光・サービス産業等と結びついて、新たな産業を生み、雇用の場

を創出すると考えられる。鶴来町には長年、質、量ともに秀でた手取川伏流水を使った清酒製造等の発酵産業や豊かな森林を使った製材など自然資源を活かしてきた産業基盤がある。構造改革特区の認定による地元産品への再評価が進むことから、水、森林資源、農産物等の第１次産品をさらに取り込み、創意工夫を凝らした新たな生産活動や起業を目指す。

（３）ふるさと教育の推進と地域コミュニティーの醸成

清酒製造等の発酵産業は、地域風土と深く結びついていることから、観光振興や農業の活性化だけでなく、子どもたちらを対象としたふるさと教育の素材としても活用が可能になるとともに、北部を中心に都市化が進む鶴来町においては、地域コミュニティーづくりを進める上での「接着剤」としても機能すると考えられ、行政と住民が連携して、ふるさと教育の推進と地域コミュニティーの醸成を図る。

７　構造改革特別区域の実施が構造改革特別区域に及ぼす経済的社会的効果

（１） 期待される経済的社会的効果

〇新規起業

濁酒製造と、それによるもてなしが、農家民宿や農園レストランを活性化し、地域資源を取りこんだ新たな起業が期待される。特に農家民宿においては、平成 17 年度に農家民宿における簡易な消防設備等の規制緩和の全国展開が見込まれていることから、これを活用した農家民宿の増加を積極的に進める。

また、濁酒は鶴来町に古くから展開する清酒、醤油、味噌、酢等の発酵産業や食品産業を刺激し、新たな商品開発を促すと見込まれる。

	現　在	平成 17 年度目標	平成 20 年度目標
農家民宿等の開業件数	4 件	6 件	10 件
自家製による酒類製造件数	0 件	2 件	5 件

〇観光客の増加

農家民宿において濁酒を提供することにより、地域の魅力が倍加し、鶴来町内への観光客等の来訪者の増加が見込まれる。特に、どぶろく祭りや鶴来体験コンパクトツアー等の新たなイベントの開催により、観光客が拡大することが予想できる。

また、どぶろく特区のまちづくりと並行して、町の魅力アップの一環として、中心部の歴史的町並みの整備も現在進めていることから、町歩き、町並み探訪等の来訪者の増加も期待できる。

	平成 15 年度実績	平成 17 年度目標	平成 20 年度目標
宿泊客数	9,153 人	10,000 人	12,000 人
日帰り客数	991,307 人	1,050,000 人	1,100,000 人

〇町民所得の向上

観光客をはじめとした入り込み客の増加に伴う宿泊産業の活性化、物販店の売上増加、農産物の販売増加などから、町民所得の向上が期待される。

	平成 12 年度実績	平成 17 年度目標	平成 20 年度目標
町内純生産	48，695 百万円	49，000 百万円	50，000 百万円
就業者１人当たり町内純生産	5，095 千円	5，200 千円	5，300 千円

８　特定事業の名称

707　特定農業者による濁酒の製造事業

９　構造改革特別区域において実施し又はその実施を促進しようとする特定事業に関連する事業その他の構造改革特別区域計画の実施に関し地方公共団体が必要と認める事項

＜特定事業に関連する事業＞

（１）自然と産業・文化にふれる白山・鶴来ツーリズムの確立

①どぶろく祭りの開催

どぶろく特区の認定を受けたことを記念して行うもので、町をはじめ、地元のＪＡ、観光協会、商工会、住民団体等で実行委員会を組織し、企画、運営する。地域の風土や暮らし、産物や地域づくりについて語り合う食談やシンポジウム等を実施するほか、地場産品の展示、即売等を行う構想である。

②大人を対象とした鶴来体験コンパクトツアーの開発と拡充

既に実施され、好評の「ちいさな旅」や「加賀百万石ウオーク鶴来コース」的なコンパクトなツアーを開発・拡充し、鶴来町への来訪者、滞在客の増加を目指す。特に、産業、文化的要素も織り込み、旅慣れた大人を満足させ得る内容を目指す。

③遠足や総合学習等による「鶴来郷体験ツアー」（仮称）の実施

小中学生らを対象とした遠足や総合学習の場として、環境整備を図る。これまで遠足の行き先は、獅子吼高原や樹木公園のある石川県林業試験場、石川県ふれあい昆虫館など郊外が多かったが、今後は町中の老舗や工房なども取りこみ、文化的要素もある「鶴来郷体験ツアー」（仮称）を実施する。

（２）自然資源の保全とふるさと産業の振興と創出

①　鶴来産米のブランド化推進と農地の保全

鶴来町は水稲種子では石川県内のシェア 38.9%、酒米では同じく 40.9%を占めるなど、良質米の産地としての地位を確保している。白山・鶴来ツーリズム創造特区の認定により、コメどころとしてのイメージを高めるとともに、各種ＰＲ活動と連動させることにより、鶴来産米のブランド化、付加価値化と消費拡大を推進する。

同時に、後継者難などから遊休地化が進む農地の保全と利活用の促進を図る。特に中山間地域において、農地の遊休地化が顕著であるが、中山間地域等直接支払制度の活用と併せ、集落の話し合いを進め、耕作放棄地の解消に努める。具体的には、遊休地で野菜を栽培し、観光地での直売や旬菜市への出荷を行う。

②　森林自然の保全・復元

グリーン・ツーリズムの一環として現在、実施している「獅子吼の森づくり」事業を拡大する。特に、荒廃が目立つスキー場跡地では都市住民らとの協働による植樹を通じて、緑あふれる里山に復元する。

③農家民宿、農園レストランの拡大

「緑」や「農」に対して理解や関心が高まることにより、鶴来町への新たなツアー客の増加が見込まれる。このような来訪者の受け皿として、地場産品を食材にした農家民宿や農園レストランの増設・開設を目指す。これは平成 17 年度にも全国展開が見込まれている農家民宿における簡易な消防設備等の規制緩和を活用するもので、同時に鶴来町内では、町内の各種団体が加わった、白山・鶴来ツーリズム推進協議会（仮称）を発足させ、農業関係者などに農家民宿、農園レストランの開業を呼びかけ、新たな起業に結びつける。

④食品加工産業の活性化

鶴来町には醸造を中心とした食品加工産業が地場産業として根を下ろしている。濁酒にちなんで、地元メーカーなどによって、新たな加工食品の研究開発を進め、食品加工産業の活性化を図る。

（３）ふるさと教育の推進と地域コミュニティーの醸成

①地域・生涯学習の題材として、ふるさと教育の推進

濁酒は、「農林業」と「醸造」「ものづくり」を結びつける格好の素材である。これを地域・生涯学習の題材の一つとして、小中学生や住民らを対象に、醸造など地場産業の歴史と現状や自然風土について学習する機会を提供し、ふるさと教育を推進する。

②地域コミュニティーの醸成

価値観の多様化などから、鶴来町においても住民の連帯感が薄れつつあるといわれ、特に金沢市に隣接し、新興住宅街を形成する北部地区を中心にそれは顕著であると指摘されている。ふるさと教育と連携させながら、濁酒を秋祭りやイベントなどに活用し、地域コミュニティーの醸成を図る。

（別紙）

１　特定事業の名称

707

特定農業者による濁酒の製造事業

２　当該規制の特例措置の適用を受けようとする者

特区内において、酒類を自己の営業場において飲用に供する業（旅館、民宿、料理飲食店など）を併せ営む農業者で、自ら生産した米を原料として濁酒を製造しようとする者

３　当該規制の特例措置の適用の開始の日

本特別区域計画の認定を受けた日

４　特定事業の内容

白山・鶴来ツーリズム創造特区（鶴来町全域）内で、農家民宿や農園レストランなど、酒類を自己の営業場において飲用に供する業を併せ営む農業者が、当該特区内に所在する自己の酒類の製造場において自ら生産した米を原料として濁酒を製造し、提供・販売する。

この場合において本事業の実施主体が、当該特区内に所在する自己の酒類の製造場において濁酒を製造するため、濁酒の製造免許を申請した場合には、酒税法第７条第２項（最低製造数量基準（年間６ｋｌ））の規定は、適用しない。

５　当該規制の特例措置の内容

バブル経済の崩壊後、人々は、生活の真の豊かさや、本物を求める志向が強まっている。特に、公共団体、企業等の週５日制の普及による余暇時間の拡大を背景に、旅行の形態は、ゆったりとした時間の流れの中で、自然に親しみながら、地域の産物に直接ふれ、味わい、人々と交流するスタイルが進展してきている。

当該規制の特例措置により、農家民宿等を営む農業者は、自ら生産した米を原料として濁酒を製造する場合には、製造免許に係る最低製造数量基準を適用しないものとなり、酒類製造免許を受けることが可能になる。こうして、農家民宿等で濁酒が提供されれば、スローライフや本物を志向する今日の大衆のニーズを鮮烈な形で満たすと言える。濁酒を味わいながら、宿の主人らと語り合うことを通じて、その土地の自然風土や文化、歴史をも想起させ、地域探訪、地域周遊という新たなツアースタイルをつくる原動力にもなり得る。

これによって、農家民宿への参入や濁酒に合った料理や土産物の開発など農家民宿の多様な営業展開を促し、農業はもとより、地域産業の地盤を活力に富んだものにすると期待できる。特に、鶴来町の場合は、酒造をはじめとして、醤油、味噌、麹、酢など、地域に根ざした醸造業も主要な地位を占めていることから、「体験」「学習」を

切り口に、濁酒と連携した新たなツアーの実施が可能となることから、当該特例措置の適用が必要である。

なお、当該事業による酒類製造においては、酒税の納税義務者として、必要な申告納税や記帳義務を遵守するものである。